

ネギ

使用産地：茨城県、静岡県、鳥取県など各地

使用目的：

現在日本各地で各種のネギ（根深ネギ（白ネギ）、葉ネギ（小ネギ、万能ネギ））でコフナは使用されています。使用される目的として下記のものが増やられます。

- ・ 冬場の秀品率の向上（茨城 根深ネギ）
- ・ 夏越しのネギの秀品率の向上（鳥取、大分 根深ネギ）
- ・ 土壌消毒剤の使用回数を減らす土づくりのため（小ネギ）
- ・ 葉先枯れを減らして秀品率を向上させるため
- ・ 各種土壌病害対策でのコフナ・ソーラー法（各種ネギ）
- ・ 圃場の排水性、保水性の改善

等々



鳥取県境港市

2017年9月21日撮影 なお、撮影4日前に台風の大雨・風の影響を受けるも、水の影響で一部畝が崩れるが、収穫に大きな影響なし。おおむね1200ケース／10a以上の出荷を見込む

《根深ネギ》

1. 土壤消毒後の微生物補給(元肥施用)・堆肥投入時や緑肥すき込み時(収穫終了後)

土壤消毒後は土壤が無菌に近い状態になっているため、元肥などと共にコフナを投入します。(微生物が大きく減った状態で病原菌が侵入すると、土壤全体に広がりやすくなるため)

土壤消毒をされる場合

元肥と同時施用 コフナ 10袋以上/10a (全層に混和)

(投入後、定植までの期間は10日から2週間おいて下さい)

土壤消毒をされない場合(コフナ・ソーラー法を除く)

元肥と同時施用 コフナ 10袋以上/10a (全層に混和)

※堆肥や緑肥をすきこむ場合は、このときにコフナと一緒に投入して下さい。

(投入後、定植までの期間は10日から2週間おいて下さい)



2. 土寄せ時(追肥)

中耕・追肥を行う際、畝間に肥料を散布すると同時にコフナ1号を5~7袋/10a散布します。その後土寄せを行います。

☆地温の上昇と、肥料吸収が良くなり、太りが早くなる。ネギの表面も美しくなる。

さび病などの対策としても使用されています。



コフナを投入し、この時期の多湿性(土壤の物理性)を改善するとともに、コフナを繁殖させ、病原菌の活動しにくい環境を作りましょう。

3. コフナ・ソーラー法（埼玉・茨城を中心に実施）

実施期間：1ヵ月半～2ヶ月以上

施用方法：全層に下記資材を投入・混和・水分調整を行い被覆

区の設定：①太陽熱区（被覆のみ）

②コフナ区（コフナ1号 20袋、バイオマス 20袋／10a）

両方に牛糞堆肥を2ヶ月前に投入済

※水分については梅雨時の降水を利用

10a	10a
① 陽熱のみ	②コフナ・ソーラー法



コフナ・ソーラー法実施後の土壌微生物活性度

	①太陽熱のみ	②コフナソーラー法
微生物数	4, 200, 000 / g	4, 900, 000 / g
微生物活性度	42%	63%
主な微生物	主に細菌、次に糸状菌が多い	細菌が多く、糸状菌・放線菌は少ない
好・嫌気性微生物割合	好気性菌が主	好気・嫌気ともに同じくらい
病原菌の有無	病原菌なし	病原菌なし

※補足：圃場の土で、微生物活性度が60%を超えるのは数値として相当に高いとされています。

※フランス コフナ社より大学に分析を依頼

4. 還元消毒時に投入（北海道）

還元消毒の効果をより安定化するためにコフナを併用。

使用方法：

- 還元消毒に沿った手法で、フスマまたは米糠 1t / 10a と コフナ 150～300kg / 10a を 作土層へ混和する。
- 以降は還元消毒と同様の処理を行なう。
- 有機物が投入されることと、微生物相改善による肥料効果の増進が期待できることから、この2点を踏まえて元肥の施肥量を考慮してください。

使用効果：

- 土壤に混和されたフスマ・米糠などの有機物を微生物で分解し、還元作用を促進する。
- 還元条件により密度の高まった嫌気性菌が嫌気発酵の過程で有機酸を生成し病害菌の活動を抑制する。
- 還元消毒後、微生物の多様化・活性化により土壤の静菌作用の向上を図る。

《葉ネギ》

小ネギの栽培におけるポイントは、栽培土壌の水分コントロールがしやすいことと言われております。また、ネギは根に酸素が多く必要とされており、同時に痛みやすい性格を持っております。そのことにより、土壌に団粒構造を作ることにより、ネギ栽培を安定化させることができます。

同時に、周年での栽培を行うことにより塩類集積の問題が有り、適切な肥料コントロールをする必要が有ります。そこで土壌に腐植を多く含ませ、保肥力を高め、安定した肥効を出せる土に変えていくと、より肥培管理が楽になっていきます。

＜実際の使用法＞

パターン1：薬剤消毒していない場合（生育が徐々に悪化してきている場合）

※ 現時点において、ほぼ適切な肥料、堆肥を使用しているが、バランスが崩れてきている可能性が有る。

年2回コフナ1号もしくはコフナMP（10～20袋／10a）の施用及び堆肥を炭素主体（ワラ・もみがら・バガスなど）の有機質で施用する。

※ 夏場の施用は避けて下さい。

※ コフナ施用後10日程度播種まで期間をあけて下さい。

パターン2：薬剤消毒を年1回程度

※ バランスが崩れ始めている、もしくは腐植が不足している。

コフナ・ソーラー法の実施（コフナ・ソーラー法チラシ参照）

5～9月にかけて各圃場にて約1ヶ月程度実施する。

パターン3：薬剤消毒を年に複数回実施

※ 早急に腐植を作り、団粒構造を作る。同時に病原菌が繁殖している恐れが有り、消毒も必要

① 薬剤消毒を実施

② コフナ・ソーラー法の実施（コフナ・ソーラー法チラシ参照）

5～9月にかけて各圃場にて約1ヶ月程度実施する。

もしくは、

① 緑肥作物（ソルゴー、ギニアグラスなど）を栽培

② コフナと同時にすき込み、そのままコフナ・ソーラー法実施

＜最後に・・・＞

パターン2、3を実施する際には、施設で1ヶ月以上栽培できなくなります。しかしながら、土づくりを行うことによりその後の栽培が改善されてきます。

これは、周年栽培をされているハウレンソウ、チンゲンサイなどでも同様なことは報告されております。ネギは特に根が弱く、その影響が葉先に出やすいため、根を保護するためにも、ひび割れしにくい土づくりを目指しましょう。